

「再処理工場周辺に住む女性たちの交流会（1998年）」に参加して
三笠朋子（2021年記）



思えば、もう23年も前の1998年に、私は「ネットワークみどり」のメンバーの1人として、仏国のラ・アークの交流会に、連れ合いと4人の子供を連れて参加した。1991年、核燃サイクル施設受入れの是非を問う知事選に負け、それでも諦めない運動を続けていた私たちにとって、既に再処理工場の核廃棄物の汚染が言われ、子供たちに健康被害も出ているというラ・アークやセラフィールドに暮らして、日々不安の中で声を上げている彼女たちに会うことは、今後の運動に、大きな意義があると思えたからだ。

三日間の濃密な時間を共にして、一番の収穫だったのは、私たちと同じ母親たちが、子供たちの将来に不安を抱え、怒り、連帯し、行動しているということを感じたことと、絶対に再処理工場は動かすべきではないと確信出来たということだった。しかし今現在振り返ると、それを六ヶ所での運動に生かし切れたとはとても言えない。でも言えるのは、まだ諦めないし、やはり再処理工場は止めるべきだということ。



以下の内容は 1998 年当時の状況です。現在とは大きく違う点もありますのでご注意ください。



日時：1998 年 7 月 29～30 日

場所：森のロビン・シェルブール支部（ラ・ロレット）

参加者：

「怒れる母親たちの会」 ナタリー・ギスマール、カミーエ・アルジョンタンクレール・フーサバ、キャロリーヌ・チェボウ、モニク・ボヌマン ほか数名

「CORE」 ジャニン・アリス・スミス

「ネットワークみどり」 三笠朋子



プログラム：	29 日	午前	各グループの紹介と交流
		午後	レクチャー 「核廃棄物の地上・海上輸送について」 ジャッキー・ボンヌマン（森のロビン会長） 「世界における核エネルギーのステイタス」 マイケル・シュナイダー（ワイズ・パリ所長）
		夜	共同声明について
	30 日	午前	再処理工場見学
		午後	記者会見

「怒れる母親たちの会」

1996年2月、ヴィエル教授の「小児白血病多発」論文をきっかけに結成。

再処理工場の約35km圏内に住む普通の母親たちが集まった。

同年5・6月、COGEMA（コジエマ）社に対して情報公開を求める署名運動を展開し、約4千筆を集め、ドミニク・ボワネ環境大臣に提出。「グリーンピース」のキャンペーンに連動して、コジエマ社前で抗議行動を行う。

「CORE」 Cumbrians Opposed to Radioactive Environment

（放射能環境に反対するカンブリア人たちの会）

1980年に結成。会員は千人近く、その運営費は会費と「グリーンピース」や「ゴールドスミス財団」の援助などにより、専従2名を置いている。参加したジャンンも専従の一人であり、彼女の息子は白血病になり、彼女自身も甲状腺を病んでいる。活動は多岐にわたり、放射能測定や、ビジターセンター前での広報活動やパフォーマンス、著名な漫画家デザインのTシャツを作ったりと、初めは素人だった彼女たちも、今ではかなり高いレベルにある。

「ネットワークみどり」

1991年3月に結成。その1ヶ月前に核燃サイクルの是非を問う激しい知事選に反対派が負け、意気消沈している中、高木仁三郎氏が話してくれた松葉の放射能測定をメインに立ち上げた。弘前大学環境医学研究会が測定を引き受けてくれ、1991年5月から松葉・飲料水の定点観測を開始。98年に環境医研の廃部から、名古屋大・古川路明氏、京大原子炉実験所・小出裕章氏などをお願いしてきた。そのほか、様々な方たちによる講演会や、「青森県の未来を考えよう」核燃などに関するアンケート調査などを実施。

★ラ・アーグからの報告

ラ・アーグ再処理工場は仏国の北西部、ノルマンディ地方のコタンタン半島に位置する。コタンタン半島はラ・マンシュ（イギリス）海峡に突き出て、軍港でもあるシェルブールからはイギリス行のフェリーも出ている。中心のシェルブールに原子力潜水艦の工場が、ラ・アーグ岬の中央に再処理工場と核廃棄物貯蔵センター、その少し南にフラマンヴィルの原子力発電所があるほかは、漁業と酪農・農業が盛んで、景色や風土が六ヶ所によく似ている。

工場を経営しているCOGEMAは、核実験と核兵器製造を行ってきた原子力庁（89%）と公営燃料公社（11%）との共同出資会社であり、ウラン採掘から再処理まで手掛けている。現在、再処理工場はUP2（1995年操業）とUP3（1989年操業）の2つが稼働しており、この2つで年間16トンのプルトニウムを取り出す能力がある。特にUP3は外国専用の再処理工場で、日本やドイツなど6ヶ国と結んだ契約金によって建設された。

これらの再処理工場は、毎年2億3千万リットルにも及ぶ放射性廃棄物を大西洋に排出しており、1997年1月、海岸で遊んだり魚介類をよく食べたりする子供たちが白血病にな

りやすいとジャン・フランソワ・ヴィエル教授によって、英国の医学雑誌に発表された。この論文は大きな波紋を投げかけ、フランス政府は大論争の末、新たな調査を開始した。

また使用済み核燃料の輸送容器からの放射能汚染も、大きな問題になっている。仏国各地、あるいは欧州各国の原発からラ・アーグに向けて輸送される使用済み核燃料容器は、ほとんどシェルブールに近いヴァローニュ駅まで鉄道で輸送され、そこでトラックに積み替えられて 30km 離れた再処理工場まで運ばれる。ヴァローニュ到着後の検査で、基準値を遙かに超える表面汚染が確認されながら、COGEMA と電力公社は隠していた。このことが公表され、鉄道の労働者たちは怒り、ストを実施。その後ドイツ内での強い反対運動などで、ドイツからの輸送は止まったままになっている。また日本から船で運ばれた使用済み核燃料の容器からも、表面汚染が見つかったが、隠されていた。

このように 1997 年以降、次々と環境汚染や、輸送による汚染などの事実が暴露されてきており、COGEMA も仏国政府も、市民団体の放射能測定・監視機関（ACRO）や環境保護団体のグリーンピース等のデータを無視できない状況になってきた。



★セラフィールドからの報告

セラフィールド再処理工場は、英国北西部カンブリア地方のアイリッシュ海に面する海岸に位置する。カンブリア地方は国立公園でもあり、景色が美しく、ピーターラビットでもよく知られている。漁業や酪農・農業も盛んだった。

この工場は、核兵器開発の一部として 1952 年から操業が開始され、100%国営の BNFL（英国核燃料公社）が運転している。故障・事故を繰り返しながら 30 年以上も稼働を続け、現在も二つの工場が運転中。しかしその一つ、1964 年から操業が開始された B205 は、7 月 16 日に放射能漏れ事故が起り運転停止、現在まだ再開のめどは立っていない。もう一つの THORP は 1970 年代に建設が着手されながら、国内外の反対で 1994 年まで操業が遅れ

た。主に海外の使用済み核燃料を再処理している（その内、日本からの分は 38%を占める）。1998 年 4 月「CORE」が[THORP～3years of failure]を公表。操業開始から 3 年間の再処理実績や放出放射能などのデータをまとめているが、その自然界への汚染はひどいもので、オスパー条約による規制ができた今、期限の 2020 年前の閉鎖の可能性が高くなった。つい最近、グリーンピースはセラフィールド核施設の周りの放射能汚染度は、チェルノブイリ周辺地域のそれよりも 400 倍近く高いと発表。チェルノブイリでは、何万人も避難させた汚染地域よりずっと危険なところで、日々の暮らしを送っている人たちが沢山おり、そのうえ、その人たちには何も知らされていない。

このように汚染の深刻化しているセラフィールドでは、以前は海水浴客でにぎわっていた海辺も泳ぐ人もなく、魚は地元の人には食わずに、仏国へ輸出している。ジャンンは、日本に来たこともあり、日本に再処理工場が出来たら、日本人は魚介類をたくさん食べるから、被害も大きくなると心配している。

1983 年セラフィールド周辺の小児白血病は、英国平均の 10 倍に達するというデータが出された。1997 年 8 月には英国保険省の委託調査によって、英国とアイルランドの子供たちの歯を分析した結果、子供たちの歯にプルトニウムが蓄積されていることが明らかになった



★青森からの報告

青森県は南北に細長い本州の北の端にあり、六ヶ所村は太平洋側に位置する。冬は寒く雪が積もり、漁業と酪農・農業に支えられている。現在、ウラン濃縮工場・低レベル廃棄物埋設センター・高レベル廃棄物貯蔵管理センター・再処理工場が存在するが、核燃施設には、とても不適な場所である。その一つが周辺に軍事施設が沢山あるからで、在日米軍三沢基地・航空自衛隊三沢基地・三沢対地射爆場が存在し、航空機の落下事故も起こっている。もう一つは、日本は地震国であるが、施設の支持岩盤である鷹架層は軟岩に属し、隣接する石

油備蓄基地のタンクは不当沈下を起こしている。その上地下水が豊富な湖沼地帯だ。

また六ヶ所村の少し北の街の東通村には沸騰水型原発が 1 基着工され、大間町には、改良型沸騰水型原発でフル MOX を目指す計画が進んでいる。

日本は狭く、地下資源に乏しいので、核燃料サイクルはまさに夢のエネルギーと位置付けられている。1966 年 7 月、実用の原子力発電所が稼働してから、現在 52 基もの原発が動き、どこの使用済み燃料貯蔵プールもいっぱいになってきた。「もんじゅ」のナトリウム火災事故や東海再処理工場の火災爆発事故と、核燃料サイクルが危うくなってきた今、プルサーマル導入計画が前面に出されてきた。

この核燃サイクル計画は、1984 年 7 月電事連より六ヶ所村に要請があり、翌年 1 月、当時の六ヶ所村長が、村民の反対を無視して受入れを表明。94000 筆の反対署名を無視して、4 月に知事も受入れを表明。その後も反対運動は衰えず、1986 年に始まった海域調査には、漁師たちが漁船を出して阻止行動を行い、港では母親たちが徹夜の座り込みを実施。しかし 1988 年から 10 年に渡ってバラまかれた電源三法交付金 190 億円の影響も大きく、次第に核燃推進・反対の意見の食い違いから、村が分断されていった。1991 年 2 月知事選で推進派が当選し、核燃サイクル事業が進められていった。もちろん反対派で地道に運動を続けているグループも、少なくはない。

- ・放射能から子供を守る母親の会 1985 年結成 月に 1 回のデモを継続
- ・核燃料サイクル阻止 1 万人訴訟原告団 1988 年結成 行政訴訟を展開

★記者会見共同声明

1998 年 7 月 29・30 日に行われたフラマンヴィルでの
核廃棄物再処理工場に関する家族ぐるみの国際交流会の報告

参加団体： 「怒れる母親たちの会」(仏国：ラ・アーク)
「CORE」(英国：セラフィールド)
「ネットワークみどり」(日本：青森)

この度の会合に当たり、相互の交流と情報交換の促進を図り、六ヶ所、セラフィールド、ラ・アークの核施設の将来に責任を負っている科学的、政治的決定機関へ、共同で働きかけることを決定した。

サイトの近隣に住む人々の健康と海や大地の環境汚染に関する研究と監視を充実させ、調和させることに特に注意を払うこととした。また、関係諸企業の代表者すべてと対話する努力を一層かたむけ、使用済み核燃料の再処理核施設が将来をもたらす社会的、環境的不安に対して回答を与えるために、集団で熟慮する努力を重ねることとした。

共同の目的は、原子力産業の事業や、いくつかの施設の解体に伴うインパクトすべてを推

定評価すること、また住民や子供の健康を害するようなレベルを引き下げようとする
ことである。

この点に関して、オスパール海洋国際条件の枠内で、北大西洋の産業汚染について、関係
諸国の環境大臣たちが決定した 2020 年に原子力施設の放射能排出をなくすという規定は、
事態を無用に引き延ばしているというべきである。このような期間を設けることは、今日乳
幼児あるいは子供である世代の放射線に対するリスクを大きくするばかりでなく、か弱い
身体を持った人々の一群を形成するだけだろう。

最後に、参加者全員は、日本の北・青森県の六ヶ所村に建設中の使用済み核燃料貯蔵プー
ルで、再処理を待つ間の貯蔵に合意する決定を下した青森県知事に抗議する。プルトニウム
抽出と取扱いに関する経済的な正当性と技術、戦略的リスクに対する正当な根拠がない以
上、六ヶ所再処理工場建設の中止と、日仏間、日英間の再処理契約の終了するよう求めるこ
とで一致した。

署名者リスト：「ネットワーク・みどり」

「放射能から子供を守る母親たちの会」

「CORE」

「SAND」 Scotland Against Nuclear Environment

「怒れる母親の会」



★再処理工場見学

前日までの肌寒く小雨模様の天気が晴れ、青空が見える。敷地内のいたる所に花壇があり、色とりどりの花が咲いている。

初めに日本語版のビデオで、再処理工場の簡単な説明があったが、日本人の案内の人が休みで、英語の説明を受けたので、所々しか分からなかった。フィルムバッチを着け、緊急用の酸素マスクを持って、六ヶ所でも既に出来上がっている使用済み核燃料プール、せん断・溶解の施設、ガラス固化体の施設などを見学した。建物内にも、いたる所に本物そっくりの造花が飾っており、それが妙に、誤魔化して造り上げた原子力産業を象徴しているように見え、とても印象的だった。

